

Planetary Aesthetics

惑星の美学

アスムント・ハヴステーン＝ミケルセン (1977 年デンマーク生まれ)

アーティスト兼理論家による講演

佐賀大学 2024 年 11 月 27 日 10:30 - 12:00

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部西洋画専攻

司会・通訳：富田俊明（佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）

世界的な気候危機は現代美術の制作条件にどのような変化をもたらすのでしょうか？ 惑星の美学 *planetary aesthetics* は、現代美術の新しい考え方と実践方法の背後にある原則とアイデアを定式化する試みです。この講義では、人新世に基づいたより大きな分析枠組みの中に惑星の美学を位置づけます。惑星の美学は、人類が惑星の保存と再生に配慮するために惑星を可視化することを目的とした芸術です。

所要時間約 90 分（通訳、質疑応答含む）。

履歴書

アスムント・ハヴステーン＝ミケルセンは、デンマーク王立芸術アカデミーの修士号を取得しています。建築に重点を置いた彼の芸術的実践は、絵画、インスタレーション、彫刻、そして一般的特異点 *generic singularity*、非哲学 *non-philosophy*、現代美術、貢献コミュニティなどの理論的執筆に至るまで、さまざまな形式に及びます。2018 年、ヴァイレ・フィヨルドにある彼のプロジェクト「Flooded Modernity」（ル・コルビュジエによるサヴォア邸の水没レプリカ）は国際的な注目を集めました。彼の作品は、サウサンプトンのジョン・ハンサード・ギャラリー、コペンハーゲンのシャルロットテンボー美術館とセルビアのノヴィサド現代美術館など、デンマークおよびヨーロッパ中の美術館やギャラリーで展示されています。彼の著書『Planetary Aesthetics』は、コペンハーゲンの A Mock Book Publishing House から 2025 年 3 月に出版される予定です。

www.asmundhavsteen.net

講義の要旨:

本講義では、**気候危機** *climate crisis* と**人新世** *anthropocene* の時代における現代美術の新しい考え方および実践方法として、**惑星の美学** *planetary aesthetics* の概念を紹介します。

ここでいくつかの質問に対処する必要があります: 惑星とは何ですか? 人新世とは何ですか? 現代アートとは何ですか? 気候危機とは何ですか?

惑星:

惑星 *the planetary* は、現在の人類文明の**グローバル化** *globalisation* に対置されるものとして最もよく理解できます。惑星は地球の**深い時代** *deep time* であり、その寿命は 45 億年を超え、そのうち多細胞生物が存在しているのは最近の 5 億 5,000 万年です。人類の文明はわずか約 12,000 年で、グローバル化は 15 世紀以降のことであり、惑星の時間と比較するとほんの短い時間です。

惑星としての地球は約 840 万種の生物種が棲息し、それぞれが生命の形態を表し、地球という惑星の固有の多様性を証明しています。私たちはこれを**生物多様性** *bio-diversity* と呼びます。

グローバリゼーションにより、代わりにいくつかの種が増えました: 支配的な種族である**人類** *homo sapiens* はおよそ 80 億人の個体にまで増え、3 種族を食用奴隷として飼育しています: 260 億頭のニワトリ、15 億頭のウシ、7 億 7,800 万頭のブタです。これに加え多数のヒツジ、ネコ、イヌ、ウマ、研究用マウスやラットを飼育しています。グローバリゼーションのマトリックスの内部では、大部分の生命体が私たちのニーズと利益に応じて分散されています。これは、陸上に生息する脊椎動物の総生物量のうち、34% が人間であるという事実に現れています。63% は家畜で構成されており、残りの 3% は野生の動物です。

したがって、惑星は何百万年にもわたって進化した生命体のバリエーションを表しています。私たちは人間以外のあらゆる種類の生命体と**進化の連続性** *evolutionary continuity* を共有しているため、私たち自身の体の構成と機能に進化の刻印が刻まれています。私たち人間の身体は、**進化** *evolution* の深い時代から生まれました。グローバル化は私たちの現在の現実ですが、私たちの体は進化の膨大な過去の現れです。

したがって、私たちの肉体的存在は地球の進化のおかげであるだけでなく、非常に具体的なレベルで、私たちの存在は地球が提供するエコサービスにも依存しています。

大気中には適切な量の酸素があるのおかげで私たちは呼吸できるのです (光合成の副産物として植物によって生成されます)。温度の中央値が暑すぎたり寒すぎたりしないこと (窒素、酸素、アルゴンに対する二酸化炭素の割合)。地球には窒素と水の循環があり、それによって私たちの作物が成長することができます (つまり、私たちは食べるものを得ることができます)。一部の科学者にとって、地球は全体として、私たちが知っているように、生命のための独自の条件を作り出している**ガイア** *gaia* という名前の自己調整実体です (これまでに知られている、生命が存在する宇宙で唯一の惑星です)。

地球上では、貨幣を抽象的な交換価値として、グローバルな場で分配される商品、サービス、**天然資源** *natural resource* の絶え間ない需要と供給に基づく**資本主義** *capitalism* の経済システムを通じて、グローバリゼーションが生じています。グローバリゼーションが始まった時期はさまざまですが、15 世紀は世界

中で西洋の**植民地化** *colonisations* が始まった時期です。ここには、後に**産業革命** *industrial revolution* 中に拡大し、グローバル・ノースとグローバル・サウスとの力の差と経済的不平等を決定することになる基礎が築かれました。

人新世

すべての資源が採取され、消費のために飼育された動物、単一文化作物のために破壊された生物多様性に富んだ地域、機械を動かすための二酸化炭素の排出など、過去数世紀に地球に何が起こったのかを概念化するために、**人新世** *anthropocene* の概念はこれらの多くの次元を捉えています。

この用語は、人間が地球に与えた影響を説明する新しい地質学的出来事を定義するものとして見なされなければなりません。人新世をめぐっては多くの議論があり、人新世作業部会 Anthropocene Working Group が潜在的な層位学的指標（たとえば 1782 年のより効率的な新しい蒸気エンジンの発明による二酸化炭素の増加、あるいは 1950 年の原子実験による核放射性降下物）を確定しようと 8 年以上にわたって努力したにもかかわらず、新しい地質時代としての人新世は国際地質会議 International Geological Congress では認められていません。

それにもかかわらず、この概念は多くの研究者、文化史家、科学者によって使用されています。なぜなら、この概念は人間がどのように大気や陸上のバイオマスを根本的に変え、採取活動を通じて多くの生態系を破壊したかを説明しているからです。

人新世のサブコンセプトは、1950 年以降に指数関数的に成長する一連の連動した社会政治的傾向と地球システムの傾向を示す**大加速化** *great acceleration* です。

これらには、人口の増加、エネルギー消費、都市化、肥料と農薬の使用、交通機関（たくさんの自動車、鉄道、空港、貨物船）、国際観光が含まれますが、同時に大気中の二酸化炭素やメタンや窒素酸化物の増加、海洋の酸性化と海洋生物の減少、農地の増加と生物多様性の喪失などによる生態系の悪化も含まれます。

大加速化の間に、人類の数はほぼ 3 倍に増加し（1950 年の 27 億人から今日の 80 億人）、これにより地球上で新たな前例のない資源圧力が生じています。

大加速化と同時に、人間の栄養補給の方法も変化しています。より固定的で自給自足的な生活様式から、一世帯住宅でスーパーマーケットや高速道路に依存し、大量の食料（肉、飽和脂肪、ファーストフード）を消費する**アメリカ的な生活様式** *American way of life* へと。ほとんどの西洋人にとっての日常であるこの世界を、私は**人新世の舞台** *anthropocene arena* と呼びます。なぜなら、それは世界を消費するための空間として存在しているからです。

現代美術

このように、私たちの視点を現代美術と美学に移すことで、人新世は、最近 250 年間の芸術制作をどのように見るかについて異なる視点を提供し、最終的には惑星の美学を理解するための出発点となります。

現代の美学 *modern aesthetics* は、ヨーロッパ諸国で起こった産業革命とほぼ同時期に出現し、芸術作品が自律的かつメディア固有のものであるという考えによって定義されます。その後、自然主義、写実主義、象徴主義、印象主義から、未来主義、ダダイズム、シュルレアリスム、構成主義、スプレマティズムを伴う

20 世紀初頭の歴史的アヴァンギャルドに至るまで、多種多様な芸術運動が現代美術に多様性と範囲を与えました。ここでは、芸術を政治の領域に結びつける新しい形式の実験と試みによる、現代の美学の概念に対する最初の本格的な攻撃が見られます。

これらすべての動きは、石炭、石油、ガスといった化石燃料に基づく新しいエネルギー・システムの進化の中で起こりました。

1950 年代の大加速化の始まりまでに、米国が新たな世界の主導国となり、実存の様式だけでなくエネルギー消費の形態も全く新しいものを導入するという変化が起こります。

1960 年代から、新しいエネルギー・インフラが整い、私が**グローバル化された美学 *globalised aesthetics***と呼ぶものを可能にする数多くの芸術運動が米国で生まれました。

この命題の背後には、古典的なモダニズム美学からネオ・アヴァンギャルドとともに現れた現在のポスト・ミディアム状況への芸術理解の変化の結果として、この時期に芸術界の新たな国際化が起こったという考えがあります。この新たな国際化は 1960 年代のネオ・アヴァンギャルド運動を随伴しました。

この時期に現れたのは、ミニマリズム、ポップアート、コンセプチュアルアート、ランドアート、フェミニズム、ビデオアート、パフォーマンスアート、制度批評などの多くの美的体制であり、共通の特徴として以前のモダニズム的芸術理解（特にその関心である形式主義、自律性、天才としての芸術家の姿）から脱却したいという願望を共有していました。

しかし、ネオ・アヴァンギャルドとそれに続く現代美術の出現は、大加速化とエネルギー消費の大幅な増大の中で可能になった新しい生活様式に依存していました。ネオ・アヴァンギャルドから出てきたすべてのアーティストは、アートの制作のために複雑で高密度の都市構造（ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京）に依存しており、空港、車、安い食べ物へのアクセスの恩恵を受けていました。この時代には、通信技術の革命とともに、これまでにないアイデア、作品、人の交流が起こりました。

33 年以上にわたる大規模なグローバリゼーション（1991 年のソ連崩壊で加速された）とインターネットと化石資本主義を基盤としたデジタル化を経て、今日、現代美術は世界的な現象となっており、さまざまな形のアーティストがグローバリゼーションに固有のモビリティとコミュニケーションの可能性から利益を得ています。関係性の美学、ポストインターネット・アート、参加型アート、テキスト・アート、新表現主義、AI アートのいずれかを信奉しているとしても、どのアーティストも、空港から飛行機で移動したり、展示会に芸術作品を発送したり、インターネットを介して電子メールを送信したり携帯電話を使用します。これらの活動は、レアアース抽出によって可能となったエネルギー・インフラストラクチャに依存しているのです。今日、どんなにユニークな現代アーティストであっても、グローバル化した市場資本主義の世界の外に存在することはできません。

惑星の美学と気候危機

このグローバル化した美学（ネオ・アヴァンギャルドおよびグローバル化した美学の現れとしての現代美術）を説明する方法として、惑星の美学は、2 つの目的を持った芸術制作の新しい方法として生まれます。それは、**惑星を目に見えるようにし *Making the planetary visible***、**私たちが惑星を大切にできるようにする *we can care for it*** ことです。

なぜでしょうか？ 現在の気候危機はグローバリゼーションの人新世のマトリックス内で消費される大量のエネルギーの結果です。大気中の二酸化炭素の増加は、西側のグローバリゼーションの結果です。気候危機は私たちの生活様式が外的に結果したものであり、人間の生命だけでなく他のすべての生命体の生存条件としての地球を破壊しています。私たちは今日、6,600 万年前に地球上の恐竜を絶滅させた大惨事と同様の、6 回目の大量絶滅の真っ只中にいます。

このように、気候危機は倫理的な問題を引き起こしています。私たちは、私たち自身の生活条件を破壊しているだけでなく、人間と人間以外の将来の世代（地球上の生物多様性の継続）を破壊しているのです。

グローバル化された美学全体の特徴は、それが人間のために *on behalf of humans* 人間世界を批判していることです。それは鑑賞者を階級、人種、性別の制約から解放することを望んでいますが、同時に芸術作品、パフォーマンス、または「状況」との新たな身体的出会いを通じて、主題の空間的および時間的可能性を開くことを望んでいます。

惑星の美学もまた解放的なものですが、地球を代表する *on behalf of the planet* ものです。つまり、人間以外の、あるいは人間を超えたもの、あるいは地球上で生命が存続できるように大気を保存することについてです。

これが、惑星の美学をその内容において他とは異なる、そしてラディカルなものにしている理由ですが、それが特定のメディアに限定されているわけではありません。惑星の美学は、歴史的前衛とその後の 1960 年代のネオ・アヴァンギャルドで起こった芸術の概念の拡張を継続しています。惑星の美学はポスト・ミディアムの状況で展開されます。

そこで、惑星の美学の内容について、惑星の美学に準拠していると考えられる芸術作品の側面をいくつか挙げてみましょう。それらは、インスタレーション、展覧会、または芸術活動に影響を与える軌跡 *trajectories*、ベクトルとして見ることができます。

- 人間以外の存在 non-human との共生のための新しい形を創造しようとする芸術、または再野生化を伴う作品
- 人間以外の存在の現実の認識と経験をそれらの存在のリアリティにおいて探究する芸術、つまり、生きようとする身体に根差した意識 *subject-for-a-life* を持つ存在であるとはどういう意味を探究する芸術
- 人間の活動による破壊的な影響（鉱業、農業、二酸化炭素排出などによる）を描写しようとする芸術
- 西洋の形而上学とその種差別（ヒト以外の生物に対する差別）を解体しようとする芸術
- 二酸化炭素の排出量の継続的な影響による壊滅的な結果を指摘する芸術
- 西洋の唯物論と化石資本主義の批判を試みる芸術
- 地球の深い時間を可視化しようとする芸術
- 見る人の中に宇宙とより調和する存在の新しい形を創造しようとする芸術
- 西洋的な生き方とは別の形で地球に棲息する方法を探る、「他の想像力」を探究する芸術
- 消費削減のモデルとして、資源への影響を意図的に減らす（リサイクル材料）ことに取り組む芸術

以上に見てきたように、惑星の美学は、その多様性のすべてにおける生命の可能性をテーマにし、強調

し、焦点を当て、または擁護する芸術の一形態であり、地球固有の生物多様性の回復のために働きます。惑星の美学は、人間が地球と人間以外の生命をどのように扱うかに関して倫理的な芸術を制作する方法です。

キーワード - 概念:

グローバリゼーション		
化石資本	><	惑星
人新世の舞台 anthropocene arena		
分割 the division		進化の継続
テクノ・ネイチャー techno-nature	><	再野生化
モノカルチャー（単一栽培）		自然の再生
		生物多様性
人類文明	><	深い時代 deep time
グローバル化した美学	><	惑星の美学
現代的な美学		